

## 本を楽しく読んであげることが本好きにする秘訣

ここまで漢字の楽しいマスター法を紹介してきましたが、実は一つひとつの漢字をいくらたくさん覚えられても、それだけでは、漢字は生きた言葉としては子供のなかにうまく定着していきません。本のなかですでに覚えた漢字にもう一度出合うことが大切なのです。

もちろん、本のなかでそれまで知らなかった漢字に出合ったら、解字を通してその成り立ちを理解しながら覚えてしまうのもいいでしょう。

つまり、漢字の読み方をマスターさせるいちばんよい方法は、本好きにすることなのです。正確には本にかぎらず、漫画でも、新聞でも、チラシでも、手当たり次第、文章を読むようにするといいのです。文章を読む中で、漢字の読み方を自然と覚えてしまうことほど、簡単な学習法はありません。

子供を本好きにするコツは、まずはお母さんなり、お父さんなりが、本を読んであげることになります。このとき、読み手が心がけなければならぬことは、自分自身が心から楽しんで本を読むことです。そ

のことによって、「本って面白いものだな」と一段と強くアピールすることができます。

本は、絵本であっても、望ましいのは漢字かな交じり文であることです。こうした要請に答えている出版社『登龍館』の絵本は、漢字かな交じり文になっています。

気に入った本であれば、何回でも何十回でも、果ては本がボロボロになるまで、くり返して読んでもらうことを望むのが、小学校低学年ぐらいまでの子供の大きな特長といえます。そうこうしているうちに、その本が漢字かな交じり文で綴られていれば、漢字もすんなり読めるようになってしまうものです。挙げ句は、子供が自分で読むようになります。

この段階まで進んだら、今度は、子供に本を読んでもらいます。「面白かったよ」「上手に読めるようになったのね」などと、前向きな感想を伝えることを忘れないでください。子供は、本の内容をもっと深く理解し、もっと味わい豊かに読み聞かせようと努力するでしょう。

こうして、本が読めるようになるだけでなく、内容を読み取る力もついて、本がますます好きになっていきます。

そのうち、本の中で知らない漢字に出合っても、解字の知恵を働かせたり、前後の文脈から推察したりして、すらすら読んでしまうようになります。

私は長年にわたり、こうして漢字が読めるようになり、本好きになった子供をたくさん見てきています。それだけに、小学校一年生の教科書から、普通に漢字かな交じり文になっていないのが残念でならないのです。ひらがなだけの文章は、読みにくいだけでなく、内容を把握するうえでもたいへん難しいものです。

そこで、私が推奨しているのは、文章のなかで、漢字に置き換えたほうがよいと思われる箇所には、その漢字を書いた紙を貼って、新たに漢字かな交じり文にするという方法です。

ともあれ、漢字力をつけるには、小学校低学年までに、小学校で学習すべき漢字のほとんどを読めるようにすることが勝負を決めるといっていいでしょう。学ぶべきことを、学ぶべき時期にしっかり身につけてこそ、よりよく成長していくことができると肝に銘ずるべきです。

そして、この読む力につながる漢字力という基盤がしっかりできさえすれば、親の出番はここまでと心得るべきです。その後の勉強は全

般にわたって、子供にまかせることです。

小学校高学年はちょうど、子供の自主性が急速に育ってくる時期で、今度はそれを育てることが大事になります。親の心がけとしては、孔子が『論語』の中でいっているように本人にぎりぎりまで孤軍奮闘させ、手を貸さないようにすることが大切です。

憤セザレバ 啓セズ。

悱セザレバ 発セズ。

(論語 述而第七)

「いま一步というところでもだえ苦しんでいる、そういう相手になければ知識を与えてやらない。心では理解しながら、口に出そうとしてうまく表現できなくて苦しんでいる、そういう相手になければ教え導いてやらない」の意味。